

高配を賜った。また同地の森本神社総代内貴久氏にも、多くの便宜をはかっていただいた。なお、浄土寺本および観心十界曼荼羅図一般について、津田豊彦先生に多くご教示いただいた。三重県下の事例については平松令三先生、山形県下の事例については岩鼻通明先生にご教示いただいた。これらの方々にお礼申し上げます。

- (6) 黒田日出男「熊野観心十界曼荼羅の宇宙」(宮田 登編「性と身分」(大系仏教と日本人8)一九八九 春秋社)
- (7) 芦野英也「北村山地方の熊野観心十界図」(「村山民俗」五一 一九九二)
- (8) 岩鼻通明「越中立山女人救済儀礼再考」(「芸能」三四—二 平成四)
- (9) 小俣町史編さん委員会編『小俣町史』通史編(昭和六三 小俣町)口絵図版および一八五—一八七頁
- (10) 平松令三「史料紹介 熊野観心十界曼陀羅」(「三重の古文化」六八 平成四)
- (11) 川崎市民ミュージアム編『閻魔登場—閻魔登場展解説図録—』一九八九
- (12) 和歌山県立博物館編『わかやまけんの市町村が指定したふるさと文化財』昭和五八
- (13) 林 雅彦「日本の絵解き—資料と研究—」昭和五六 三弥井書店  
同「増補日本の絵解き—資料と研究—」昭和五九 三弥井書店
- (14) 赤井達郎「絵解きの系譜」一九八九 教育社
- (15) 徳田和夫「絵語りと物語り」一九九〇 平凡社
- (16) バーバラ・ルーシュ「もう一つの中世像—比丘尼・御伽草子・来世—」平成三 思文閣出版
- (17) 赤井達郎「熊野比丘尼と椰の葉」(同氏註14前掲論書)
- (18) 黒田氏註6前掲論文。この松念寺本について、庄司千賀氏は同氏註4前掲論文で、銘の享保八年よりさらに新しいものではないかとしている。黒田氏もこの見解に立つての判断かもしれない。
- (19) 正念寺住職川中恒明師のご教示による。
- (20) 黒田氏註6前掲論文。以下、本稿での黒田氏の見解は全てこの論文による。
- (21) A本に分類されるものでも、19の正念寺の例のように、ここに三人しか描かれていないものもある。正念寺本は改補の部分を除いても、A本の中ではやや特異なものとなっている。ルーシュ氏註16前

掲書口絵参照。

- (22) 日輪・月輪を紅白に描くものとしては、17、18の珍皇寺の二本の例がある。林氏註13前掲書口絵および註6、註11等参照。
- (23) この稚児形の図像学的意味については、黒田氏註6前掲論文に述べられている。
- (24) 脊古真哉「己高山をめぐる宗教文化—滋賀県伊香郡木之本町・高月町—」(「民俗宗教」四 一九九三)
- (25) 森本区には日本電気硝子の工場および社宅が立地するなど、近年の人口流入が多い。オコナイなどの集落の行事には近年の来住者の参加も見られるが、宗禅寺の檀家は元来の住民である二〇戸程の家々である。
- (26) 服部修一「森本の由緒と沿革史」昭和四八 森本郷誌刊行会
- (27) 脊古註24前掲論文。なお大円寺は現在は無住で、高月町唐川の曹洞宗養浩庵の住職が兼務している。
- (28) これは銘等はないが、比較的近年の作と思われる、心字を中心に仏界以下地獄に至るまでの十界を画くものである。全体が円形に収められている場合には「円頓観心十界図」と呼ばれるものであるが、矩形に画く例としては、萩原氏註2前掲書一〇四頁の第35図三重県西光寺の例、庄司氏註4前掲論文の写真3光台寺の例などがある。
- (29) 伊香郡郷土史編纂会編『近江伊香郡志』上(昭和二七 昭和四七 名著出版復刻)五九七—六〇四頁、服部氏註26前掲書には関係文書の影印および翻刻が示されている。
- (30) 平松令三氏のご教示によれば、三重県下には本稿の一覧表に示した以外に、未紹介のものが四点あり、計二八例となる。

## 〔附 記〕

宗禅寺本観心十界曼荼羅図の調査に際しては、同寺住職服部修一師のご

る。このような民間宗教者・芸能者は江戸時代には、次第に、いずれかの権威を本所として、統制され、組織化されていくようになる。陰陽師およびそれに類するものについては、土御門家によって近世陰陽道に組織化されていく。森本に居住したこれらの宗教者・芸能者は土御門家とは関係を持つことはなかったようで、区有文書等に土御門家関係のものは全く残されていない。

森本にこのような芸能者・宗教者が居住していたということ、宗禅寺に残された本曼茶羅とを結び付けて考えてみたくなるが、これは近接の大円寺の例などに見たように、近世の在地の仏教の問題と見るべきものであって、前の想定は無理であろう。

#### 四 小 結

以上、宗禅寺本観心十界曼茶羅図の紹介を中心として、本曼茶羅の研究史、分類について簡単に述べ、宗禅寺本をめぐる状況にも言及してみた。

本曼茶羅を最初に大きく取り上げたのは、既に述べた萩原龍夫氏の研究で、これが一書にまとまって上梓されたのは一九八三（昭和五八）年のことであった。この書物では八点の本曼茶羅の所在が紹介されたが、その後今日にいたる一〇年間で、本曼茶羅の事例は二八点を数えるようになった<sup>(30)</sup>。この勢いから見て、今後ともさらに多くの事例が追加されていくことが期待できる。

こうして、世に知られた本曼茶羅の所在を見てみると、萩原氏の

指摘された八点の内、三点が熊野比丘尼の後裔に所蔵されており、他の事例も熊野比丘尼との何らかの関係を想定できるものであったのに対して、今日知られる二八点に対象を広げると、熊野比丘尼との関係を想定できるものはかえって少数と見ることができよう。

前にものべたように、これまで本曼茶羅の研究は熊野比丘尼と絵解きという二面から進められてきて、多くの事例の発掘および図像学的な検討などが行われてきた。しかし、これだけ各宗派にわたった事例が明かにされてきた現状では、近世仏教の問題として、本曼茶羅の受容・展開を考えていくのも、重要な視点の一つとなろう。

小稿では、宗禅寺本の紹介を主な目的としているので、本曼茶羅全体の系統・分類の問題については舌足らずに終わったところが多い。多くの写真を掲げての諸本の比較検討については別稿を期したい。

#### 〔註〕

- (1) 鈴木昭英「熊野信仰と美術」〔佛教藝術〕八一 昭和四六
- (2) 萩原龍夫「巫女と仏教史―熊野比丘尼の使命と展開―」昭和五八 吉川弘文館
- (3) 錦仁氏の絵解き研究会例会報告（一九七九 萩原氏註2前掲書）
- (4) 庄司千賀「山形県村山地方の地獄絵と絵解き」〔絵解き研究〕四 昭和六一
- (5) 大阪市立博物館編「社寺参詣曼茶羅」一九八七 平凡社

るのが珍しい<sup>(23)</sup>。

以上見てきたような特徴が宗禅寺本にはあるが、本曼荼羅全体の分類のなかでは、最初に基準とした鳥居の描かれ方、ここに述べた他の共通点などから判断して、4の大円院、10の大円寺、17の珍皇寺本と同じくC本としておきたい。

なお、本曼荼羅に往々にして見られる、かつて軸装にされる以前に、携帯の際に折たたんで運ばれたことよって、付けられたとされている折目は宗禅寺本には全く見られない。

### 三 宗禅寺本をめぐる環境

ここで紹介した宗禅寺本に接するきっかけとなったのは、筆者をふくむ数名の研究グループで行っている、宗禅寺の所在する高月町を含む滋賀県伊香郡の己高山周辺地域の宗教文化の総合的な調査・研究の一環として、オコナイをはじめとする高月町森本区の民俗調査を実施したことによる。

この高月町およびこれに接する木之本町の大部分を含む己高山周辺地域の宗教文化については、既に概略はまとめたので併せ参照されたいが、<sup>(24)</sup>現在では殆どの集落（現在の区、ほぼ近世村にあたる）が大谷派を中心とする真宗各派の門徒が大部分を占めるのに対して、この森本ではこの集落に所在する唯一の寺である宗禅寺は曹洞宗寺院であり、もともとのこの集落の住民はこの寺の檀家となっている<sup>(25)</sup>。

近接の真宗門徒が大部分を占める集落と異なり、森本には、この地域に一般的なオコナイや野神、燈明祭以外にも、民俗宗教の事例が多くあり、新春行事としてオコナイの他に、的射ち・綱引きが実施されている。この森本には他の殆どの集落に見られる仏堂がなく、これらの行事も森本神社のみを対象として行われている。この他にも神明講や盆行事、虫供養などもかつては盛んに行われた<sup>(26)</sup>。また、寺院行事も真宗寺院と異なり、三月十五日に涅槃会があり、その際に、釈迦涅槃図とともに本曼荼羅が懸けられている。

森本区に直ぐ隣接する高月町高月区の大円寺でも、同日に涅槃会が実施される。この大円寺は、宗禅寺と同様曹洞宗寺院ではあるが、檀家寺の機能はなく、本堂はこの周辺の各集落に殆どの場合所在する集落の中心的な宗教施設としての仏堂（この場合は観音堂）の機能を持つている<sup>(27)</sup>。大円寺の涅槃会には、本堂に釈迦涅槃図が懸けられ、庫裏に心の字を中心に十界を描いた「観心十界図」<sup>(28)</sup>他が懸けられる。この場合、「観心十界図」は宗禅寺における本曼荼羅と同様の意味を持つて懸けられていると考えられよう。この地域の数少ない、真宗以外の寺院について、涅槃会などの際に懸けられる図像、所蔵されている図像などについて、今後注意してみる必要がある。さて、今までに述べたこと以外で、森本集落で注目すべき点としては、この地にかつて、幸若舞を行うものがいたとの伝承があり、関係史料が区有文書として現在に伝えられている<sup>(29)</sup>。このなかの秀吉書状などにみられるように、森本には戦国期以来、舞々太夫と陰陽太夫が居住しており、代々の領主から特権を得ていたことが知られ

宗禅寺本には、いままでに挙げたC本としての特徴だけでなく、宗禅寺本独自の点が多く見られる。全般的な特徴として、色使い、筆致などの面で奔放さがあり、省略も目立つ。奔放な筆づかいとしては、下辺の地獄の炎が燃え上がる様が、他本の定型的な描写と比べ、宗禅寺本の大きな特色となっている。また、上部左右の日輪・月輪も金銀を使わず、日輪が赤、月輪が白に描かれている<sup>(22)</sup>。

他の諸本との省略による図様のちがいとしては、上から見ていくと、「人生の階段」の下の阿弥陀五尊と考えられる仏菩薩の両脇に、通常は右に花盛りの桜と左に針葉樹が描かれるが、左の針葉樹が省略されている。天界の二人の飛天が舞っている場面にも、仏菩薩の周りと同様に散華が描かれるのが通例であるのに対して、宗禅寺本ではこれも見られない。右辺中央の修羅界では、他の本では、切腹する武士が一人と相戦う三組六人の武士が描かれているが、宗禅寺本には戦う武士は五人しか描かれていない。さらに、左下の無間地獄の場面で、他の本にはある亡者がつかまっている白い布状のものも省略されている。

省略とは逆に、宗禅寺本のみ描かれているものとしては、閻魔王の左右に、他本にも見られる浄玻璃鏡と天秤の他に、人頭杖と冥官らしい人物が加えられている。

全体に重要な省略はなく、他の本に描かれている場面は、皆揃っているが、少し変わったところとしては、この図像全体の中心部、法会を行う僧侶たちの下、賽の河原の上に描かれる人物が他の本では、稚児形となっているのに対して、宗禅寺本では僧形となっている

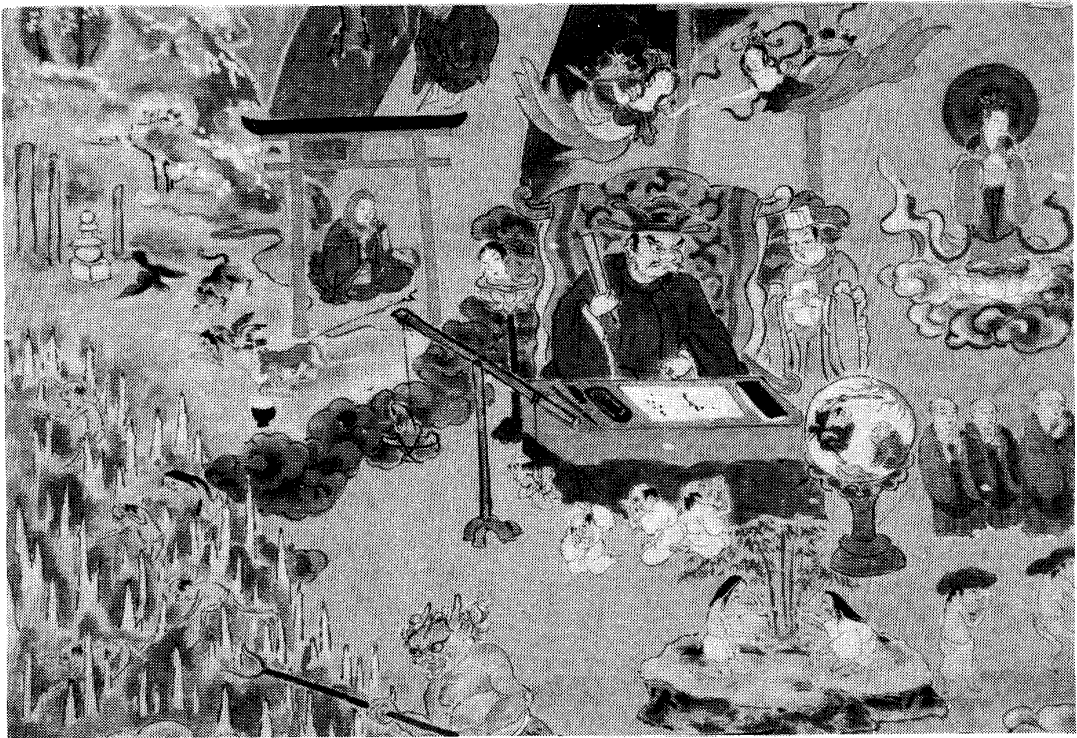


写真3 宗禅寺本部分



写真2 浄土寺本部分

C本との共通点、宗禅寺本独自の点、全体的な特徴の順に説明を加える。

C本との共通点としては、分類の基準とした鳥居の描かれ方以外に、まず目に付くのは、人界に男女三人の人物しか描かれていないことである。A、B本に属するものでは、B本の11の浄土寺の例を示したように、ここにあと二人、計五人の人物が描かれている。<sup>(21)</sup>その他、C本と共通する点としては、男女二人が中にいる右端に描かれる殿舎の高欄が中央で切れていないこと、中央の法会を営む僧侶たちの前の供物に付随して置かれている三具足が台の上に供物と同じような間隔で離して描かれていること、その台の上に花びらが散っていることなどはA本とは異なり、宗禅寺本のC本、B本に共通する特徴である。

B本とは異なり、A本、C本との共通の特徴としては、中央下の地藏菩薩がいる賽の河原の場面で、五輪塔を納めた小さな祠が、どの系統の本でも二つ描かれているが、B本では右側の祠が輪郭だけで、着色されていないが、宗禅寺本は他のA本、C本と同様二つの祠とも着色されている。この他、閻魔王の背後の雲の盛り上がりも、B本のように取り囲むような形ではなく、A本、C本のように、閻魔王の左右に雲が覗く形となっている。

A、B本とは異なるC本の中だけでの共通点としては、左端の針の山に亡者を追い上げていく鬼が持っているものが金棒ではなく、刺又であること、賽の河原の下で亡者を釘で地面に打ち付けている鬼が上半身裸に描かれていることなどが指摘できる。

像の内、中央の最も高い位置に描かれている壮年期の男女のいずれかが、後を振り返った形となっているが、どの人物が振り返っているかがまず目に付く。

B本は中央の男性、A本はその手前の女性、C本は中央の男性の次ぎの女性が後を振り返る形となっている。この他、各人物の持物、人物の背景に描かれる樹木なども、A、B、C本それぞれで共通する特徴がある。A本に分類されるのは、1の宝性寺、6の長学院、7の龍護寺、8の円福寺、13の個人蔵のもの、19の正念寺、22の個人蔵のものであり、B本は、9の個人蔵、12の浄土寺、16の西福寺本であり、C本には、4の大円院、10の大円寺、17の珍皇寺本が含まれる。

A、B、C諸本それぞれの中でも、一つとして全く同一の図様のものはなく、(写本であるから当然のことであるが)一例ごとに微妙なことなる。どの特徴を捉えて分類の基準とするかは、判断の難しいところであるが、ここでは、本曼荼羅に描かれる八箇所の鳥居の描写を一つの基準としてみたい。八箇所の鳥居の内二つは「人生の階段」の入口と出口にあり、残りは天、人、修羅、畜生、餓鬼、地獄の六趣(六迷界)の入口に描かれている。A本では、人界の鳥居がほぼ正面から描かれている以外は、それぞれの鳥居が角度を持って斜めに描かれている。B本では、逆に人界の鳥居が斜めに描かれ、それ以外の七箇所の鳥居は正面から描かれている。また、B本では石女地獄の位置が他のA、C本と異なることもあって、畜生界の鳥居の位置が他に比べて下方に描かれている。C本は人界も含

めて全ての鳥居が正面から描かれている。

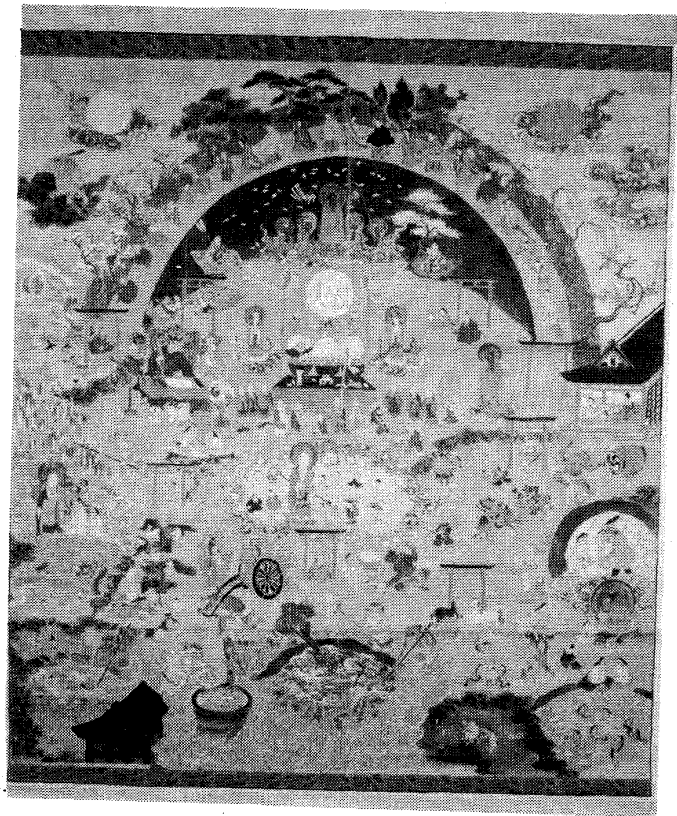


写真1 宗禅寺本観心十界曼荼羅図

この鳥居の描かれ方を基準とすれば、宗禅寺本はC本に含めて考えることができる。もともと宗禅寺本は他のC本に分類されるものとも、本曼荼羅の全体の中でも、異例の、独自の点が多く、鳥居の描かれ方だけでC本とするには慎重であらねばならない。例えば、最初に見た「人生の階段」の振り返っている人物はA本と同様の中央の男性の手前の女性と坂の途中の女性の二人となっている。

図版を見ながら、宗禅寺本の特徴の説明をしていきたい。以下、



て論じるつもりなので、小稿では多くふれないが、問題点を一・二指摘しておきたい。

庄司千賀氏、芦野英也氏が紹介された山形県村山地方の例に特徴的なように、ここでは主に一月十六日に公開される幾多の種類の地獄絵の一種として、本曼荼羅も伝わっており、現在もその機能を果たしていることが重要であろう。また、今回紹介する宗禅寺の例は、現在三月十五日に行われている同寺の涅槃会に際して、釈迦涅槃図とともに懸けられている。さらに、19の正念寺の例でも、数年前の先代住職の頃までは、やはり、三月十五日の涅槃会に涅槃図とともに懸けられていたという。<sup>(19)</sup> また、16の西福寺の例、17・18の珍皇寺の例のように盆行事の一環として、本曼荼羅が懸けられている事例もある。

もつとも、これら現在の各寺における本曼荼羅の果たしている役割が、その製作当初からのものかどうかといった疑問は当然残るが、本曼荼羅が成立時点で持っていた意味と、その後の展開、普及・受容の問題は別に考える必要がある。現在知られる本曼荼羅各本の製作時期、目的はそれぞれ個々の場合について検討すべき問題と言えよう。

## 二 宗禅寺本の紹介

さて、この節では、宗禅寺本観心十界曼荼羅図の紹介を行う。本曼荼羅の一般的な特色としては、諸本が極めてよく似た大きさ、基

本的に同じ図様をしていることがあげられよう。これは同様なネーミングで呼ばれており、同じく地獄の描写に共通する点のある「立山曼荼羅」の諸本の相異と、比較してみるとなお明かとなる。一覧表に挙げておいた内、18の珍皇寺の例が他の諸本と大きく異なる以外は、細かな相異から三種類ないし四種類に分類できるが、基本的には同一の図様と見てよいものである。

ここでは黒田日出男氏の分類を参照しながら、宗禅寺本を本曼荼羅の分類のなかに位置付けてみたい。黒田氏は18の珍皇寺本をA系統とし、これ以外をB系統として、B-1a、B-1b、B-1c、B-2本の四種に分類している。<sup>(20)</sup> 黒田氏は、このうちB-2本を一連のくずれた図像配置を持つものとしているが、確かにくずれていることはまちがいないが、これを一まとめに一つの分類単位とできるかどうかは疑問であろう。筆者はこのB-2本には黒田氏の言うB-1a、B-1b、B-1cの各本から——どのタイプからと指摘することは困難であるが——それぞれくずれていったものが含まれると考えている。よって小稿では、黒田氏の分類のB-1a、B-1b、B-1c本をそれぞれA、B、C本とし——私見では黒田氏の分類と若干の出入りがあるのであるが、ここではそのことには触れず——、B-2本については、A、B、C本以外としてまとめしておく。

A、B、C本には、それぞれ他の本と区別できる特徴がいくつかある。もつとも目に付くものとしては、上部に描かれる「人生の階段」の人物像が指摘される。この赤子から老人にいたるまでの人物



表 観心十界曼荼羅図一覧

所蔵者	所在地	法量(cm)	所蔵者での名称	付随する絵図	懸ける機会	備考
1 宝性寺(真)	秋田県秋田市	135.0×125.5	地獄変相図		1月16日	
2 西来院(曹)	秋田県秋田市					
3 松念寺(淨)	山形県村山市	138.2×132.5	六道曼陀羅		1月16日	享保8(1723)年銘
4 大円院(天)	山形県村山市	145.2×128.5	曼陀羅			
5 蓮化寺(淨)	山形県村山市	137.0×123.0				
6 長学院(天)	山形県村山市	140.7×131.6				
7 龍護寺(曹)	山形県尾花沢市	140.0×128.0		那智参詣曼荼羅		
8 円福寺(臨)	東京都北多摩郡瑞穂町	138.0×125.3				
9 個人	新潟県佐渡郡金井町	138.0×128.5	観心十法界大絵図	那智参詣曼荼羅		旧常学院(熊野比丘尼)
10 大門寺	三重県津市	147.0×129.5	地獄極楽の絵	那智参詣曼荼羅 釈迦涅槃図		
11 観音寺	三重県津市	132.3×126.2	地獄極楽の絵			
12 浄土寺(淨)	三重県渡会郡小俣町	140.0×133.0	十界之幀	当麻曼荼羅 釈迦涅槃図		文化12(1815)年修理銘
13 個人	三重県志摩郡志摩町	146.0×130.0		浄土灌頂図	1月16日・7月16日	旧妙祐坊(熊野比丘尼)
14 宗禅寺(曹)	滋賀県伊香郡高月町	142.7×127.5	十界八大地獄図	釈迦涅槃図	3月15日(涅槃会)	
15 興禅寺(曹)	滋賀県大津市					
16 西福寺(天)	京都市東山区	147.0×133.0	六道図絵	那智参詣曼荼羅	8月8～10日(迎之盆)	
17 珍皇寺(臨)	京都市東山区		地獄極楽十界之図		8月7～10日(迎之盆)	
18 珍皇寺(臨)	京都市東山区	152.8×163.5				
19 正念寺(融)	奈良県磯城郡川西町	134.6×123.5	地獄極楽之図	釈迦涅槃図	3月15日(涅槃会)	一部補修改補
20 穀屋寺(救)	和歌山県和歌山市	144.2×118.8		紀三井寺参詣曼荼羅		
21 正覚寺(臨)	和歌山県東牟婁郡熊野川町	132.0×132.0		那智参詣曼荼羅 釈迦涅槃図		天保4(1833)年修理銘
22 個人	岡山県邑久郡久町	138.5×128.0		那智参詣曼荼羅 熊野本地絵巻		旧熊野比丘尼
23 葉師庵	香川県三豊郡仁尾町			那智参詣曼荼羅		
24 日本民芸館	東京都目黒区					

註 所蔵者欄の寺院名のあとの( )内は宗派の略記で、(真)は真言宗、(曹)は曹洞宗、(淨)は浄土宗、(天)は天台宗、(臨)は臨済宗、(融)は融通念仏宗、(救)は救世観音宗を示す。9は現在は新潟県立佐渡博物館へ寄託、19は現在は涅槃会の際には懸けられていない。

から、結論的に示されているだけで、概ね首肯できるものの一部再考の余地も感じられる。この本曼茶羅の分類・系統の問題については別の機会に改めて論じてみたい。

これら先学の調査・研究により、現在までに筆者が知り得た本曼茶羅の一覧表を示しておく。ここに掲げた二四例のうち、前述の『社寺参詣曼茶羅』および黒田日出男氏の論考で取り上げられていないものは、芦野英也氏によって紹介された5の蓮化寺、6の長学院の所蔵本<sup>(7)</sup>、岩鼻通明氏によって紹介された7の龍護寺の所蔵本<sup>(8)</sup>、町史編纂の過程で見出され、町史に紹介された12の浄土寺所蔵本<sup>(9)</sup>、平松令三氏によって紹介された11の観音寺所蔵本<sup>(10)</sup>と今回紹介する14の宗禅寺所蔵本である。諸本の図版掲載図書などについては黒田氏の論考に詳しく注記されているので参照されたい。黒田氏の論考が執筆された後に出版された重要なものとしては、1の宝性寺、8の円福寺、18の珍皇寺の諸本のカラー図版を載せる『閻魔登場—閻魔登場展解説図録—』<sup>(11)</sup>があり、漏れているものとしては、21の正覚寺本のモノクロ図版を載せる和歌山県立博物館の特別展図録がある<sup>(12)</sup>。

以上、本曼茶羅の諸本の紹介について簡単に見てきたが、今までに挙げた論考以外にも本曼茶羅にかかわる様々な問題については近年多くの研究が行われてきている。いま、それぞれの論点に立ち入って紹介する余裕はないので、ここでは管見にふれた代表的な論著を列挙しておく。本曼茶羅の研究を現在リードしているように見受けられる絵解き研究の方面からは、林雅彦氏の『日本の絵解き—資料と研究—』及び同書増補版<sup>(13)</sup>、赤井達郎氏の『絵解きの系譜』<sup>(14)</sup>があり、

中世文学の方面からの研究としては、徳田和夫氏の『絵語りと物語り』<sup>(15)</sup>、バーバラ・ルーシユ氏の『もう一つの中世像—比丘尼・御伽草子・来世—』<sup>(16)</sup>などがある。

これら多くの研究で、本曼茶羅は那智参詣曼茶羅とともに熊野比丘尼の絵解きにかかわる遺品として、戦国期から近世初期にかけて製作されたものとされることが多い。確かに、現在、米国のフリア美術館に所蔵される『住吉祭礼図屏風』とされるものなど、近世初頭の風俗画の中に、熊野比丘尼が本曼茶羅を絵解く場面が描かれているものがあり、近世初期に、本曼茶羅が熊野比丘尼の絵解きに使われていたことは間違いなからう。

しかしながら、本曼茶羅の製作期を桃山・江戸初期に限定して、江戸中期以後は殆ど作られていない<sup>(17)</sup>としたり、また、享保八(一七二二)年の寄進銘のある3の松念寺本を極めて新しいものとする見解<sup>(18)</sup>は如何なるものであろうか。現在までに知られる本曼茶羅には松念寺本を除けば、銘などから製作年の判明する例はなく、江戸初期以前に全ての事例の製作時期を想定することは問題とならう。この製作時期を近世初期以前とする想定的前提には、現在知られる本曼茶羅の事例の大部分を熊野比丘尼の絵解きにかかわる遺品として、熊野比丘尼が盛んに宗教活動を行っていた戦国期から近世初頭のものとして理解しようとする立場があるようである。

この前提自体、つまり現存の本曼茶羅を全て熊野比丘尼の絵解きに関係付けて捉えようとする見解には、筆者は多くの疑問を感じている。このことについては、諸本の分類・系統を論じる際に、改め

# 宗禅寺蔵、観心十界曼荼羅図について

——滋賀県伊香郡高月町森本——

脊 古 真 哉

## 一 はじめに

特異な雰囲気を持ち、多彩な地獄の描写で知られる観心十界曼荼羅図については、近年、各方面から注目され、多くの研究成果が見られる。小稿では、今回偶々知ることのできた観心十界曼荼羅図の一事例を紹介して、この宗禅寺所蔵本から考えられる観心十界曼荼羅図をめぐる若干の問題について述べてみたい。

宗禅寺本の観心十界曼荼羅図を紹介するのに先立って、諸本の紹介を中心とする観心十界曼荼羅図の研究史について簡単に触れておきたい。観心十界曼荼羅図（以下本曼荼羅と略す）は、元来の名称は不明で所蔵者により区々の名称で呼ばれているが、近年の研究の中では「熊野観心十界曼荼羅」と呼ばれることが多い。本曼荼羅については、熊野信仰および絵解きの両面から関心が持たれてきているが、これは熊野比丘尼という宗教者の存在を通して、同じ現象を

二面から捉えようとするものようである。

本曼荼羅について、研究の視点から最初に取り上げたのは、管見では、新潟県佐渡の個人蔵の事例を紹介した鈴木昭英氏の論考である<sup>(1)</sup>。次に研究の大きな転機をもたらしたものとしては、萩原龍夫氏の著書がある<sup>(2)</sup>。萩原氏は各地の熊野比丘尼の事例を踏まえ、熊野比丘尼が絵解きをした曼荼羅として、八例の本曼荼羅を紹介した。この後、錦仁氏<sup>(3)</sup>、庄司千賀氏<sup>(4)</sup>らによって東北地方の事例が追加され、その他、各地で新たな事例の報告が相次いだ。一九八七年に大阪市立博物館で開催された社寺参詣曼荼羅展に際して、本曼荼羅も取り上げられ、この展覧会の内容をまとめた同博物館編の『社寺参詣曼荼羅』には四点の図版が掲げられ、一五点を掲載する本曼荼羅の一覧表が示された<sup>(5)</sup>。

この後、黒田日出男氏は本曼荼羅のうち一七例について、実見調査・写真から諸本の分類を行い、内容の詳しい分析・解読を示している<sup>(6)</sup>。黒田氏の論考では、諸本の分類・系統については紙幅の都合